

宝隆院庭園の歴史と樹木

森林教育研究所・樹木医 佐野 淳之
鳥取市歴史博物館学芸員 伊藤 康晴

はじめに

本稿は鳥取城跡内にある「宝隆院庭園」の歴史性について、古文書(藩政資料)と庭園の樹木調査の成果から報告するものである。庭園は日々変化する存在であるが、鳥取城跡地における庭園の現状を記録として残すことには意義がある。すなわち、宝隆院庭園の成り立ちを明らかにして、そこに生育する樹木の樹齢と生育状態の調査成果から宝隆院庭園の歴史との関係性を考察することを目的とする。

宝隆院庭園は、江戸時代の末期に大手登城路の北側に新築された「おうぎごてん扇御殿」の庭である。宝隆院とは11代鳥取藩主となった池田よしたか慶栄の夫人池田さだこ整子のこと、慶栄が17歳で没すると、整子も17歳で受戒して宝隆院と号した。御殿には扇形の意匠が好んで用いられたといわれ、落成後は扇御殿と称された。

明治時代には扇御殿跡地に池田侯爵家の洋館別邸「仁風閣」(国重文)が建造されて、付近は様変わりするが、宝隆院庭園は新たに仁風閣の庭として歩んだ¹。平成元年(一九八九)には鳥取市指定文化財(名勝)になっている。

1. 歴史と樹木の調査について

鳥取藩主池田家の庭園に関する研究は、従来活発であったとは言えない分野である²。鳥取藩は豊富な藩政資料を今に伝えているが³、築庭など作事の具体的な内容については、まとまった資料が残されていないばかりか、藩役所の日記にもほぼ記録されないなど、不明な点が多いことが、その背景にあると言って差し支えないだろう。

日記に記録されないのは、日記に残す内容に限度

があるのは勿論であるが、一つには現場の小奉行の対応に一定程度任せていたからであると考えられる。

その一端について、鳥取城に隣接する水道堤の新規普請の事例⁴から少し述べるならば、作事奉行による比較的軽微で、個別完結性の高い普請については、「臨時」の扱いで「入用清帳」という薄手の帳を作成して事業を推進・管理することが通例とみられる⁵。庭園の築造なども同様と思われ、「臨時」の個別対応で推進されたと思われる。

本稿で扱う宝隆院庭園の作庭についても、記録資料がほとんど残されていないことから、これまで取り組んできた東照宮神域(樗谿神社社叢)や鳥取城跡の共同研究と同様⁶、古文書と樹木の調査からアプローチしてみたい。

写真1 宝隆院庭園(2023年)二ノ丸から望む



樹木の調査は、宝隆院庭園を中心に生育している主な樹木および切株を対象として、樹種を同定し、胸高直径(DBH)と樹齢を測定した。切株では、断面の年輪数を数えてそれを樹齢とした。立木では、これまでの鳥取城址の樹木調査⁷と同様に、成長錐を用いてコアを採取した。コアを研究室に持ち帰って木片に固定し、実体顕微鏡で年輪数を数えた。髓(木の中心)まで到達していたコアについてはそれを樹齢とし(記号◎)、髓近くまで到達していたコアについては年輪の曲率半径から髓の位置を推定して残

りの年輪数を読めたところまでの年輪数に加えて推定樹齢とした(記号○)。中心部が腐食していたり、コアが髓の近くまで採取できなかったものについては、年輪が読めたところまでの年輪数と長さから平均半径成長量を算出して全体の年輪数を推定して推定樹齢とした(記号△)。推定の確からしさを示す記号は後述の表1で使用している。

2. 宝隆院と扇御殿の造営

宝隆院庭園は江戸末期・文久3年(1863)に作庭されているが、時代を少し遡り「宝隆院庭園」成立の背景について確認しておく。

10代藩主池田慶行は、嘉永元年(1848)参勤から帰国した翌6月、俄に病を發して17歳で死去した。その跡をうけ幕府の命により養嗣子となったのが加賀前田家の喬松丸、11代藩主となる15歳の慶栄である。藩主就任直後に10代慶行の妹で、同年齢の整子と婚儀が執り行われた。嘉永3年初めて帰国の暇を得て5月上旬に江戸を発足するが、同23日京都伏見別邸において前藩主と同様17歳で急死する。整子は受戒して当初「宝台院」と号したが、すぐに「宝隆院」と改めた⁸。

ペリーの来航以後、江戸内湾に面した池田家下屋敷(芝金杉)が変転する中、安政地震の影響もあり、宝隆院は安政5年(1858)から大川(隅田川)新大橋の袂の浜町屋敷に住居した⁹。文久2年正月の記録には浜町屋敷にも「扇御殿」と称する宝隆院の住居が確認されることから¹⁰、扇形の意匠を多用した御殿のルーツは帰国以前の江戸屋敷にあるようである。

文久2年(1862)閏8月、幕府は参勤交代制度を緩和する。12代藩主夫人となった寛姫、東館池田家(分知家)の映姫は、11月には帰国の途に就き、12月半ばに鳥取に帰着している。鳥取藩は藩主夫人の移住に合わせ、11月末に「松平相模守奥向雑荷物」として石燈籠4基、庭石70個、石井筒2個、植木51本を江戸から相模国浦賀番所経由で回漕している¹¹。造園のための物資であるとわかる。植木には「但し鉢植ニ無之」と補記されている。鉢植ではなく、相応に樹齢のある庭木が51本も運ばれたのである。おそら

く根廻しされた状態(樹木の根を菰で丸く包みまとめること)で、他の物資と共に江戸から海路鳥取に運ばれた。藩主夫人らの国元帰国に際し、江戸屋敷での日常的な景を、新たな居住地となる鳥取城の庭に再構成したと理解される¹²。

宝隆院も当初は寛姫と同じ時期に帰国の予定であったが、やや遅れて翌文久3年3月7日に江戸を発ち4月12日に鳥取に着いている。宝隆院の住居は帰国直前まで藩主・藩主夫人と同じ三ノ丸を予定していたが、到着前4月3日になって「御内馬場え此度宝隆院様御住居向御新建相成候処、同所御馬見所射手小屋共地平し之差支相成候付、御取払被仰付、并御馬場番え小屋明ケ被仰付候」とあるように、急遽内馬場に新規に建造されることになり、慌ただしく諸施設の取り払いが命じられて普請に着手することになった¹³。三ノ丸が手狭であるために別殿になったもので¹⁴、宝隆院は新御殿(以下「扇御殿」と表記する)が出来るまで三ノ丸藩主御書院に住居し¹⁵、家老衆と面会する時は三ノ丸金ノ間を使用した¹⁶。江戸から移送された荷物は、二ノ丸走櫓一円を御道具置き場とされ運び込まれている¹⁷。

扇御殿の整地(地取)を終えたのが5月21日。その後大雲院により「御地浄」地鎮祭を行なうことになるが、帰国後初めての外出記録が見られるのもこの頃

写真2 宝隆院(池田整子・紫雲)肖像 鳥取県立博物館蔵



で、5月22日「宝隆院様、今朝六半時之御供揃、御本供二而、御城内八幡宮え御参詣、夫より興禅寺え被成御仏詣」とある。宝隆院は江戸の三田にあった東館池田家の藩邸で誕生した。産土神は兄の10代藩主池田慶行と同じ三田八幡宮(現東京都港区三田の御田八幡神社)である。慶行は鳥取城二ノ丸御殿を約130年ぶりに再建し、その御安鎮として東館池田家の江戸の産土神である三田八幡宮を鳥取城内の高台に勧請している¹⁸。宝隆院も自身の産土神にまず参詣してから、先祖の菩提寺である興禅寺に仏詣したことがこの記録から理解される。

扇御殿の普請は「諸職人差支へ」があり5月から7月まで中断されるも、7月28日には「上棟の式」が執行されるのであるが、その直前7月25日には次のような記録が見える。

【資料】

- 一、宝隆院様御新殿御寝所南側え新規御庭築立之儀、御茶道申達候旨、御側御用人申達、承届候事¹⁹

扇御殿の御庭を新規に築立することを御茶道が御側御用人を通して上申して承認されていることがわかる。扇御殿の新築に伴ない予定のなかった作庭に急遽着手することになった。これがのちの宝隆院庭園である。資料からは宝隆院の御寝所の南側に接して庭を築立されたのがわかる。現在は仁風閣のテラスから池泉まで20メートル以上離れているが、御寝所は池泉の近くに建っていたと想像される。

扇御殿は同年8月11日に落成。同17日には大雲院が御殿の御居間において御浄の祈祷をおこなった。宝隆院は三知麿(後の13代輝知)と共に、7月24日から勝見御茶屋に湯治滞在していたが、8月18日に湯湯となり新築の扇御殿に移居している²⁰。

3. 宝隆院庭園の成り立ち

「御茶道」から「御庭築立」が上申されて作庭されたことは分かったが、御茶道の誰かは管見の限り記録に見られない。どのような人物が作庭したのであろうか。

江戸前期から中期にかけての鳥取藩の御茶道は、小堀遠州の門人であった山本宗賢や三上宗与(宗賢の次席)を主な担い手に発展したとみられる²¹。宗賢については「此人山本家の元祖にて、往年小堀遠州公より御当家へ御貰ひに相成候にや」と伝えられている²²。宗賢の子宗林は、城下の慶安寺書院の庭、東館池田家の御庭、因州東照宮の弁財天社の池泉回りを手掛けたとされ²³、特に泉水を得意としたようである。他にも芳心寺、本慈院の庭を手掛けていると考えられる²⁴。池田家と縁の深い庭を作庭しており、鳥取城下町に多くの作例を遺している。

江戸時代の後期になると、三上家は御茶道召し放ちとなる。山本家は宗賢・宗林の時代、200石を拝していたが、宗林の養子となった3代舎人(のち外記)の時代には大幅に加増され、1200石の上級藩士になる。以後、御茶道とは異なる役職にすすみ、戊辰戦争で活躍する8代玄蕃にいたるまで1200石を維持した。

遠州流の御茶道は宗林の弟子筋である市川宗佐らに担われたと考えられる。市川家は3代宗佐の時代、享保期に山本宗林の弟子となり、江戸や京都に御供して修行している²⁵。幕末期の7代宗佐は、鳥取藩江戸屋敷において数寄屋道具類の御用懸りをつとめ²⁶、若い御茶道見習いは宗佐に同道して修行し

写真3 鳥取城絵図(筆者一部改変) 鳥取県立博物館蔵



た²⁷。その後参勤交代の緩和で、文久3年に宝隆院が江戸から帰国する際は、鳥取において宝隆院の「御引越御待請御用懸り」を命じられている。

先に見たように扇御殿の「御庭築立」は「御茶道」に命じられていることから、市川宗佐が作庭に関与した可能性が高いと思われる。江戸で生まれ育った宝隆院が初めて鳥取での生活を始める時、「御引越御待請御用懸り」は重要な役職であり、また宝隆院の意向なく御用懸りが命じられたとは考え難い。宝隆院の近くにあり、御茶道としての信頼も篤かったと考えられる。作庭された庭も宝隆院の意向を汲む内容と考えるのが自然であろう。

その他には、御茶道の家筋にあたる安藤惣右衛門の関与の可能性も想定される。「安藤宜茂家譜」によれば²⁸、「扇御殿御普請御用精勤致し万端都合能及出来候ニ付格別骨折勤勞」につき加増されたとある。関与はあくまで「扇御殿御普請」つまり建物の方になるが、市川宗佐の近くにおいて作庭に関わる諸施設の建造に関与した可能性は想定し得る²⁹。また宝隆院が鳥取に帰国した翌年の元治元年正月、新たに宝隆院の御用聞を仰せ付けられた町人の中に「植木商売」として植木屋甚十郎ら植木屋の存在があることにも留意すべきであろう³⁰。

先に見たように、当地はそれ以前、内馬場のあった場所である。また大手登城路に隣接していることからわかるように、旧藩主夫人の居住空間としては良好とは言えない環境である。宝隆院の扇御殿に相応しい空間にするため大規模な造成をしていると考えられる。特に南側、大手登城路側には、久松山側から大規模な盛土が築かれており(カラタチの植栽されている築堤ではない³¹)、それは扇御殿離れの「化粧ノ間」の前付近まで続いている。少なくとも外からの視界を遮る必要から盛土を築いてその上で堀を築き、または樹木を植栽する必要があったと思われる。

盛土付近に植栽されているヒノキ(裏門横)・スギ(切株)の中には、扇御殿が建造された年代と樹齢がほぼ一致する個体のあることが調査結果から得られていることから、この盛土造成が宝隆院庭園の作庭期、文久3年頃の普請である可能性を示唆している(表3参照)。

写真4 宝隆院庭園南側の盛土



4. 幕末明治の宝隆院・池田整子

鳥取における宝隆院の暮らしぶりについては、殆ど記録に残されていないが、扇御殿が完成する頃、勝見の温泉に湯治滞在しているように、しばしば湯治に出かけている。例年春か秋、吉岡や勝見に1か月内外滞在している。その他には、興禅寺・奥谷清源寺(池田家墓所)の仏詣、倉田八幡宮、布施山王権現などに日帰りで出かけている³²。記録からは湯治以外の外出は限られている。

明治時代になると鳥取城は新政府の藩治職制による改革によって政治堂(政堂)と称されるようになり、鳥取城内の建物と扇御殿は家政司の管轄とされた³³。出湯(温泉)を備える吉岡・勝見・岩井の御茶屋(別邸)は然るべき在家に与えて本陣を仰せ付けるとされた。宝隆院は明治5年の秋まで吉岡御茶屋を利用している。

明治4年(1871)7月の廃藩置県後、扇御殿は鳥取県に収公された。8年間居住した扇御殿を後にした宝隆院は、同年9月23日に池田家の私邸とされたかつての西館池田家屋敷である池田家上邸(鳥取県庁付近)に移居している。明治5年4月、宝隆院は仏式の法号を改め「紫雲」と称した。池田家上邸には約2年余り居住したのち、明治6年10月には、藩政時代銀札場であった掛出の池田家別邸(鳥取県民文化会館駐車場の中央、ムクノキの南側付近)に移居。翌年東京に移住するまで当屋敷に居住した。

旧藩主池田慶徳は明治3年9月に鳥取を出発して東京に移住。次いで嫡子輝知が同年11月。夫人寛子は廃藩置県の直後の同4年8月まで鳥取に住んだ。

最も長く鳥取に留まったのが紫雲(宝隆院)であった。明治7年6月6日に鳥取を出発した紫雲は、途中12日に京都にて泉山御陵、良正院墓所などを参詣したのち、池田慶徳の出迎えを受け、祇園の梅尾で4年ぶりに対顔した。東京浜町の池田家屋敷に到着したのは7月2日である。その後、寺島村の本邸に暮らすも、明治12年5月12日、浜町屋敷において46歳の生涯を閉じている。

墓所は江戸時代以来池田家の菩提寺である向島の弘福寺であった。神式の墓石で正面には受戒以前の名で「池田整子之墓」と刻む。同寺院周辺は大正12年の関東大震災以後、区画整理のため道路を通すなど、墓域の改葬を余儀なくされた。

昭和5年(1930)には、12代藩主池田慶徳以後の遺骨は多磨墓地に³⁴、それ以前の夫人および幼少男子15霊の墓石・遺骨は鳥取奥谷の池田家墓所(現国史跡)に改葬された。その際に池田整子(紫雲)の墓石も移送され、夫である11代慶栄の墓前に安置されているが弘福寺にあったとされる「墓誌」は見られない。

5. 宝隆院庭園の樹木

調査対象とした樹木とその特徴や用途は以下の通りである(合計12種、立木18本、切株6本)。

- ・スギ 立木2本切株3本 常緑針葉樹 ヒノキ科スギ属 青森から屋久島までの暖地に自生全国に植林されている 建築用材として利用
- ・ヒノキ 立木1本 常緑針葉樹 ヒノキ科ヒノキ属 福島県から屋久島に分布 気孔帯Y 尾根筋岩場 植林各地 寺院神社の建築仏像
- ・ヒヨクヒバ 立木1本 常緑針葉樹 ヒノキ科ヒノキ属 サワラの園芸種で細枝は細長く下垂する 気孔帯X 病虫害に強く扱いやすい庭木
- ・モミ 立木2本切株1本 常緑針葉樹 マツ科モミ属 本州から九州の海岸近くに分布 樗谿公園にも多い 葉の先端が割れる 材は白い
- ・クロマツ 立木3本 常緑針葉樹 マツ科マツ属 本州から沖縄に分布 二葉松 葉は硬い 潮風に強い 尾根や岩場 街路樹庭園樹
- ・ナギ 立木1本 常緑針葉樹 マキ科ナギ属 本

州南岸から南西諸島に分布 雌雄異株 広葉で縦方向に強い 神木建築舟材

- ・タブノキ 立木2本切株1本 常緑広葉樹 クスノキ科タブノキ属 本州から沖縄に分布 海岸に多い 葉は互生して枝先に集まる 冬芽が大きい
- ・モッコク 立木2本 常緑広葉樹 モッコク科モッコク属 千葉県沿岸部から南西諸島に分布 葉柄赤い 病虫害に強く樹形が綺麗な庭園樹
- ・イロハモミジ 立木1本 落葉広葉樹 ムクロジ科カエデ属 福島県から九州に分布 対生 種子は翼が水平に開く 紅葉が綺麗で各地に植栽
- ・サクラ 切株1本 落葉広葉樹 バラ科サクラ属 天然にはヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンなど多くの種あり 鳥取城跡には古くから多くの種類のサクラが植栽されてきた記録が残っている
- ・ケヤキ 立木2本(前庭) 落葉広葉樹 ニレ科ケヤキ属 本州から九州の丘陵や河岸に分布 樹皮まだら葉ざらつく 並木・公園建築家具
- ・クスノキ 立木1本(前庭) 常緑広葉樹 クスノキ科ニッケイ属 本州以南の太平洋側に多く大径木になる 樟脳はこの葉や枝を蒸留して得られる

この中には、鳥取の社叢に多いスダジイ、イチチョウ、ムクノキ、エノキなどの大径木や外来種は見られない。また、園芸品種である可能性があるのは、ヒヨクヒバとサクラ類のみである。

樹齢調査した樹木(立木と切株)を樹齢順に並べると表1のようになる。樹齢推定の確からしさの記号については本文の樹木調査の項を参照のこと。

表1より、今回の調査結果から、最高樹齢は160年前後と推定され、表2に示す広く鳥取城跡地の樹齢には及ばない。髓まで読めたものでは、129年のタブノキが最大樹齢を示していたが、100年を超える切株がスギ、タブノキ、モミで見られたので、伐採されなければさらに樹齢を延ばしたものと考えられる。

樹齢100年未満の樹木では、モッコク、スギ、クスノキ、ケヤキ、クロマツ、ナギなど多様な植栽が行われてきたことを示している。

表3に宝隆院に関する歴史年表に重ねた樹木の樹

表 1 宝隆院庭園の樹齢調査結果

調査番号	位 置	樹 種	直径 (cm)	推定 樹齢	推定の確 からしさ
3	裏門口	ヒノキ	60	161	△
切株 1	裏門前	スギ	79	159	△
11	裏門口	スギ	40	145	△
12	庭園南東部	タブノキ	63	129	◎
1	庭園南東部	タブノキ	75	128	○
切株 3	階段上部	タブノキ	91	120	◎
15	裏門道脇	モミ	50	119	○
切株 2	池の南側	スギ	66	116	◎
切株 5	遊歩道脇	モミ	67	109	◎
5	池泉土橋脇	ヒヨクヒバ	41	107	○
2	庭園南東部	モミ	63	105	○
4	池泉北側	モッコク	40	99	○
14	裏門道脇	スギ	38	92	○
18	前庭	クスノキ	67	92	◎
切株 6	遊歩道脇	スギ	76	90	◎
13	表門扉西	ケヤキ	85	89	○
8	池泉中島	クロマツ	26	87	○
19	前庭	ケヤキ	71	79	◎
10	池の西側	モッコク	30	72	○
16	階段下右	イロハモミジ	40	71	○
7	仁風閣前庭	クロマツ	48	69	△
9	八角塔南側	クロマツ	39	65	○
6	庭園西側	ナギ	18	43	◎
切株 4	階段左奥	サクラ	35	30	◎

(注) 2020年調査 切株はそのときの年輪数
立木の樹齢は2023年推定値

表 2 鳥取城跡地に生育する樹木の樹齢

調査番号	鳥取城跡 樹木	樹 種	直径 (cm)	推定 樹齢	推定の確 からしさ
	夫婦杉の 一本	スギ	108	319	△
	八幡宮跡	スギ	59	166	◎
	天球丸北西	クロマツ	129	166	○
	天球丸南東	クロマツ	135	167	○
17	仁風閣庭園	クロマツ	81	154	△
	二ノ丸北西	イロハモミジ	36	139	○
	二ノ丸南東	イロハモミジ	37	75	○

(注) 2020年調査 樹齢は2023年推定値
No.17のクロマツは2024年 1 月30日に伐採された円板より、
初期成長が良く、樹齢124年と推定された

齢と樹種を示す。160年生のヒノキと160年を超えるスギの切株は、宝隆院が扇御殿に移居してきた頃から生育していたと考えられる。1862年に江戸から回漕された樹木は宝隆院庭園ではなく三ノ丸にあった庭園に植栽された可能性が高いが、宝隆院(池田整子)は一時期三ノ丸に居住していたので、これらの樹木を実際に見ていた可能性がある。回漕された樹木自体の生存は確認できず、樹種や樹齢の記録も残っていないのが残念である。

154年生と推定されていたNo.17のクロマツ(アカマツとの雑種の可能性あり)は、2024年 1 月30日に伐採され、根元の円板から樹齢は124年と推定された。中心部の成長が良かったため樹齢が低く見積もられたと考えられる。116年前のお手植えのマツと同じ頃に植えられた可能性がある。樹幹は傾斜していたものの葉量は多く、傷跡には松脂も出ていたもので、マツノザイセンチュウに罹患しなければまだまだ生きていたと思われる。実体顕微鏡でセンチュウが確認できたので最近また流行してきたマツ枯れには違いないだろうが、幹の半分が腐食しており、先端が切られた跡に穴が空いていたので、そこから腐食が広がり根元まで腐ってしまった可能性がある。現存するスギ、ヒノキ、モミなど通直で樹高の高い樹木の先端が斬られているが、過度の伐採は樹木にもダメージを与え、景観の価値も低下するので、慎重に行う必要がある。

樹齢100年以上の樹木もかなり残ってはいるが、切株も多く見られるので、安易に伐採や剪定をすることなく歴史の生き証人である貴重な樹木を守っていくことも、現在を生きる人間にとって極めて重要な課題である。

100年未満の樹木は、1922年の仁風閣修繕工事および1923年(今から100年前)に久松公園が開設され、城址に桜などが植栽された時期以降から継続的に植栽されてきたことがわかる。これらの樹木は最近よく使われている外来種を含む庭木ではなく、ほとんどが鳥取に自生する多様な在来種である。このことから、宝隆院庭園を作庭・管理されてきた先人の見識に敬意を表したい。

表3 宝隆院に関する歴史年表と樹木の推定樹齢

年	月 日	年数	内 容	推定 樹齢	樹 種	調査 番号	管理 番号
天保5年(1834)	3月7日	189 年前	東館池田仲律の娘池田整子・延姫(睦姫)芝三田屋敷に誕生(宝隆院)				
天保5年(1834)	3月23日	同	池田慶栄・幼名亀丸(喬松丸)江戸本郷前田家本邸に誕生(11代藩主)				
嘉永元年(1848)	12月9日	176	池田慶栄、11代藩主に就任(15歳)				
嘉永元年(1848)	12月24日	175	慶栄と池田整子の婚儀がとりおこなわれる(ともに15歳)				
嘉永3年(1850)	5月23日	173	池田慶栄、国元鳥取への帰国途上に京都伏見屋敷において死去(17歳)				
嘉永3年(1850)	10月29日	同	池田慶徳、慶栄の遺領を相続して12代藩主となる(14歳)				
文久2年(1862)	11月29日	161	松平相模守奥向雑荷物(石燈籠・庭石・植木など)江戸より鳥取に回漕	161	ヒノキ	3	対象外
文久3年(1863)	3月7日	160	宝隆院(整子)国元に向け江戸を出発(4月12日鳥取着)	160+	スギ切株	切株1	対象外
文久3年(1863)	7月25日	同	宝隆院の御新殿御寝所南側へ新規に御庭築立することを御茶道に命じる				
文久3年(1863)	8月18日	同	宝隆院、扇御殿(御新殿)が完成して移居する				
明治4年(1871)	9月23日	152	宝隆院、池田家上邸(元西館池田家屋敷)に移居(扇御殿に8年間居住)				
明治6年(1873)	10月22日	150	宝隆院、掛出池田家別邸(元銀札場)移居(翌年6月6日東京に向け出発)				
1878		145		145	スギ	11	対象外
明治12年(1879)	5月21日	144	東京浜町の池田家屋敷にて宝隆院逝去(46歳)				
明治22年(1889)	11月	134	鳥取西高校の前身が三の丸に校舎を新築(現在地)				
1894		129		129	タブノキ	12	対象外
1895		128		128	タブノキ	1	対象外
1900		123		124	クロマツ	17	仁1-19
1902		121		121+	タブノキ切株	切株3	対象外
1904		119		119	モミ	15	対象外
1906		117		117+	スギ切株	切株2	対象外
明治40年(1907)	5月10日	116	仁風閣(御座所)竣工(宝隆院庭園・前庭・果樹園)マツを庭園にお手植え(高さ1m余)	116+	クロマツ		
1913		110		110+	モミ切株	切株5	対象外
1916		107		107	ヒヨクヒバ	5	宝5-25
1918		105		105	モミ	2	対象外
大正11年(1922)	3月6日	101	池田仲博、仁風閣建物および扇亭建物(離れ小座敷)を鳥取県に寄付				
大正11年(1922)	4月25日	同	鳥取県、仁風閣の修繕工事をおこなう(～6月初まで)				
大正12年(1923)	3月23日	100	久松公園開設。鳥取城跡に桜などが植栽される				
1924		99		99	モッコク	4	宝5-32
1931		92		92	スギ	14	対象外
1931		92		92	クスノキ	18	仁1-20
1932		91		91+	スギ切株	切株6	対象外
1934		89		89	ケヤキ	13	仁2-12
1936		87		87	クロマツ	8	宝5-39
1944		79		79	ケヤキ	19	仁1-21
昭和19年(1944)	9月9日	79	池田仲博、久松山全山を鳥取市に寄附				
昭和24年(1949)	7月	74	仁風閣1階に鳥取県立科学館を設置(同29年に科学博物館と改称)				
1951		72		72	モッコク	10	宝7-11
1952		71		71	イロハモミジ	16	宝4-6
1954		69		69	クロマツ	7	仁2-4
1958		65		65	クロマツ	9	対象外
昭和47年(1972)	3月31日	51	宝隆院庭園復元工事を終える				
昭和51年(1976)	11月3日	47	仁風閣の保存修理を終え一般公開される。宝扇庵(旧化粧の間)完成				
1980		43		43	ナギ	6	対象外
1992		31		31+	サクラ切株	切株4	対象外
2023		0					

(注) 樹木の調査は2020年と2022年、樹齢は2023年、調査番号は今回調査した樹木の番号

管理番号は樹木管理のために鳥取市がつけている番号。大径木には管理対象外となっている樹木が多い

154年と推定されていたクロマツは、2024年1月30日の伐採による円板の判別によって124年と確認された



写真5 宝隆院庭園の秋2023
鳥取の自然植生である常緑樹が多い



写真8 池越しに鳥取西高校方向を見る2022
スギ、ヒノキ、モミなどの頂部が切られている。このときは左端のNo.17のクロマツも健全に見える



写真6 上空から見た宝隆院庭園2022
扇御殿は現在の芝生上にあっただしい



写真9 裏門付近の針葉樹群2022
樹高の高くなった樹木は先端が切られている



写真7 池から見た当時の扇御殿方向2022
扇御殿と庭園との距離はもっと近かったはず



写真10 池から宝扇庵方向を見る2022
樹高の高い整った樹形の樹木が多い



写真11 丘上のタブノキ2022

この地域の極相種の1つであり自然に分布したと思われるが頂端が切り取られている

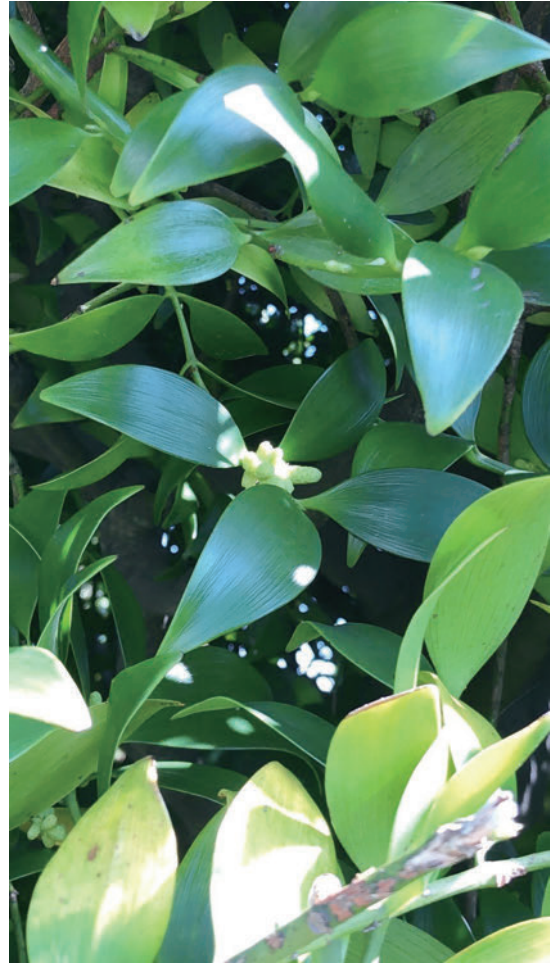


写真13 常緑針葉樹だが広葉樹のようなナギの葉2022
鳥取には自生していないので移入と思われる



写真12 ヒヨクヒバの葉先2022
別名イトヒバといいサワラの園芸品種



写真14 タブノキと思われる切株2022
中心部は腐って穴が空いているが周辺部は健全



写真15 タブノキの切株から多数の萌芽2022
これらが生き残る可能性は低い



写真16 頂部に穴の空いたクロマツ2023
伐採痕から根元まで腐食が進んだと思われる



写真17 葉がすべて褐変して枯死したクロマツ2023
樹幹の半分くらいの樹皮が剥がれていた。倒木防止のため、2本の支柱で支えられていた

このページのクロマツはすべてNo.17のクロマツ



写真18 2024年1月30日に伐採されたクロマツ
支柱2本も一緒に運ばれていった



写真19 伐採跡に残ったクロマツの切株2024
切断面の半分くらいは腐食していた



写真20 伐採されたクロマツの切断面2024
中心部と周辺の一部が腐食せずに残っていた



写真21 根元から発生していたクロマツ稚樹2023
萌芽ではなくこのクロマツの実生と思われる。今後は次世代の樹木を育てていくことが重要だろう



写真22 クロマツ根元のイロハモミジ稚樹
近くの母樹から飛んできた種子から発芽したものと思われる

おわりに

鳥取城主の奥方として生きるはずだった宝隆院(池田整子)のために扇御殿が建立された。その眼前に作られた宝隆院庭園の景色とそこに自然に生育していた植物や植栽された樹木たちは若くして未亡人となった宝隆院の癒しになっていたに違いない。今回、関係各位のご協力によって宝隆院庭園に現在生育している樹木および切株の調査の機会を与えられた。特に貴重な樹齢調査の結果とこれまでに得られている古文書(藩政資料)の分析から、宝隆院庭園の歴史と樹木の関係について論じた。宝隆院庭園のような庭園はその時代とその後の時代の人間の営力によって作られ守られてきたものであるから、作庭の理念や技術を継承していくことはもちろん大切である。それと同時に、庭園のできる前から生きていた樹木

および作庭と同時にあるいはその後に植栽されてきた樹木にも敬意を払うとともに、長い歴史を生きてきた樹木の持つ情報にも着目していくことが重要である。樹木も生物の一員として成長し、繁殖する。このような特性を考えた上で植栽・管理し、共存していくことが必要である。

冒頭にも述べたように建造物や庭園などの歴史的な遺産は、その環境そのものを研究することが求められる。このような古文書と樹木の調査に基づいた研究方法に手探りで着手し、近年ようやく種々の可能性が見えてきた段階ではあるが、こうした方法は、小地域の歴史的な研究にも応用が可能であると考えられる。

註

- 1 仁風閣については、仁風閣発行(伊藤康晴執筆)『仁風閣の周辺―白亜の洋館と池田侯爵家のあゆみ―』(2004)参照
- 2 鳥取藩主の庭園についてまとめた成果として、鳥取市歴史博物館『大名たちの庭園―江戸藩邸と諸藩城下の庭園風景―』(編集執筆伊藤、2004)があるが、絵図を中心に取上げた成果で、作庭・造園の経緯などについては、記録資料が少ないことからほぼ触れていない。
- 3 鳥取県立博物館所蔵。同発行『鳥取藩政資料目録』(1998)
- 4 鳥取市歴史博物館『ここはご城下にごさる―因州鳥取の城下町再発見―』83・115頁(2010)
- 5 iiiと同様。臨時普請を扱う作事奉行もしくは奉行人の元には、「入用清帳」が蓄積されたに相違なく、それらはある程度の期限で非現用とされて廃棄されるか、あるいは反故紙にされたと推察する。それらの記録の一部が襖の下張り文書として見出された例がある。伝存された藩政資料群の枠から漏れる作事関係資料の保存管理の一端がうかがい知れる。
- 6 その成果の一部は、鳥取市歴史博物館『樗谿を歩く―歴史と自然のフィードワーク―』(2007)および鳥取市教育委員会『鳥取城調査研究年報』第14号(2021)、伊藤(古文書)・佐野(樹木)・細田隆博(発掘)論文参照。
- 7 前掲注6(2021)、佐野淳之「鳥取城跡地における樹木のサイズと樹齢～現存する樹木の年輪から読む歴史～」『鳥取城調査研究年報』第14号
- 8 徳川家康の側室西郷の局(於愛の方)の法名「宝台院」を避けて「宝隆院」と改められた。
- 9 鳥取藩政資料「家老日記」(鳥取県立博物館蔵)安政5年11月朔日条。現東京都千代田区日本橋浜町3丁目44番地周辺
- 10 鳥取藩政資料「家老日記」文久2年正月11日条
- 11 鳥取藩政資料「江戸留守居日記」文久2年11月29日条
- 12 江戸より運ばれた植木(樹木)や石造物は、概ね三ノ丸に運ばれて御殿改変に伴う築庭に使用されたものと思われる。明治以後、その石造物がどうなったのか少し気になるところである。その後三ノ丸には明治22年に鳥取一中が当地に設置・開校されて大きく変貌を遂げることになるが、その際に樹木は別としても、石燈籠(4)、庭石(70)、石井筒(2)の石造物はどこに行ったのか。城地の土地利用が大きく変化する中、石造物が宝隆院庭園に持ち込まれた可能性がないかなど、引き続きの調査が必要であると考えている。
- 13 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月3日条
- 14 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年5月22日条
- 15 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月9日条
- 16 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年4月18日条
- 17 前掲注16と同文書
- 18 伊藤康晴「鳥取城に勧請された八幡宮二ノ丸御殿の再建に関連して～」『鳥取城調査研究年報』第14号(2021)
- 19 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年7月25日条
- 20 鳥取藩政資料「家老日記」文久3年8月18日条。『池田慶徳公御伝記』(第2巻)文久3年8月18日条
- 21 鳥取藩政資料「三上勝馬家譜」№10121「二代大日」条
- 22 「因府年表」(岡島正義著)『鳥取県史』(第7巻)所収。
- 23 「鳥府志」(岡島正義著)『鳥取県史』(第6巻)所収ほか。現知事公舎付近にあった東館の御庭は、江戸海晏寺の庭園を写したとある。
- 24 「稲葉佳景むだあるき」(拾遺)鳥取県立図書館所蔵。芳心寺の「築山者山本宗珉造」と記す。本慈院も「山本宗珉作」とあるが、おそらくは「宗珉」は「宗林」の誤りではないかと考えられる。
- 25 鳥取藩政資料「家老日記」享保18年2月11日条
- 26 鳥取藩政資料「家老日記」安政5年12月25日条
- 27 例えば中沢宗益の悴静智(鳥取藩政資料「家老日記」嘉永5年9月14日)。近藤宗逸の悴宗民(鳥取藩政資料「家老日記」安政4年3月18日条)など。
- 28 鳥取藩政資料「安藤宜茂家譜」№9984「七代惣右衛門」条
- 29 御茶道ではないが、穴生(穴太)役で鳥取城・池田家墓所の石垣普請に名をのこす服部儀助も「扇御殿御普請御用」をつとめたとあるので作庭に関与した可能性が想定される。
- 30 大嶋陽一氏よりご教示いただく。鳥取藩政資料「家老日記」元治元年正月15日条
- 31 カラタチの築堤は昭和46年における宝隆院庭園の修理の際に構築された築堤である。
- 32 鳥取藩政資料「家老日記」。明日の湖南を考える会編『資料にみる吉岡の温泉』(1998)
- 33 『新修鳥取市史』第四巻第二節「明治初年の鳥取藩・鳥取県」(2014)
- 34 弘福寺の池田慶徳墓前にあった有栖川宮熾仁の彰功碑は鳥取東照宮(当時樗谿神社)拝殿の左に移建。